

2003 年度水資源・環境学会冬季研究会『河川政策から水循環政策への転換』（2004 年 3 月 6 日）報告  
伊藤達也（金城学院大学）

今年の冬季研究会は「河川政策から水循環政策への転換」と題して、仁連孝昭会員（滋賀県立大学）に報告をいただき、秋山道雄会員（滋賀県立大学）にコメントをいただきました。参加者は 17 名ほどでした。

### 1．仁連報告

まず仁連孝昭氏から「河川政策から水循環政策への転換」の題名で報告をいただきました。報告は「1．背景、2．水循環政策への転換の努力(1)印旛沼流域水循環健全化会議、3．水循環政策への転換の努力(2)淀川流域委員会」を内容とし、現在、急速に変わりつつある我が国の河川政策を、政府審議会の答申を通して、また、流域レベルの委員会の現状を通じてご報告いただきました。

政府の河川政策がこれまでの内容から大きく変容しつつあることは、会員諸氏既にご承知のことと思います。しかし、実際に政府がどのようなスタンスで、どのような手法をもって既存の水資源政策、河川管理政策を変革しようとしているのか、また、どのあたりに目標を設定しているのか、については必ずしも明らかではありません。仁連報告ではそうした政府河川政策の転換を「河川政策から水循環政策への転換」である（べきだ）と捉え、自ら参加する淀川流域委員会を事例として報告しながら、その方向性を明らかにしようとしたと考えられます。実際に政府委員会に関与することによってどのような成果が得られたのか、また、政府委員会の議論の方向性が報告者の参加によってどのように変わったのか等については、議論の中で必ずしも明確になったわけではありませんが、報告者の参加した（している）淀川流域委員会の先進性を理解することは容易であったと言えます。さらなる論点の提出等は学会誌への投稿によって果たされることを強く希望する次第です。

### 2．秋山コメント

一方、仁連報告のコメントとして発せられた秋山報告は、実はこうした水資源政策、河川政策の転換を、研究者としてどのように位置づけ、評価するのかといった視点の強い報告であったと考えられます。筆者は、秋山氏のコメントを、これまでの水利研究の成果などを踏まえて考えた場合、河川政策から水循環政策への転換を既存研究成果の蓄積の中でどのように位置づけることができるのか、また、そうした研究からの位置づけが問題の実態把握、政策への示唆を通じてどのような有効性を発揮できるのか、という問いかけと理解しました。

このような理解を前提に仁連報告、秋山コメントを捉えた場合、仁連報告は現実の河川政策の展開過程の実態報告を中心としたものであったため、必ずしも秋山コメントとうまく整合したものとはなっておらず、一方、秋山コメントは、仁連報告をベースにしたコメントというよりも、独立した 1 つの報告となっており、その内容自体、改めて議論されるべきものであるように考えられました。既存研究成果から現実の問題、現象、政策の推移を評価する作業は研究の継続性の中で最も重要な作業の 1 つであると考えます。しかし、今回の研究会では時間制約などから、必ずしも全面的に展開できたとは思われません。仁

連報告同様、学会誌でのさらなる論点提出を希望する次第です。

### 3．討論と感想

仁連方向、秋山コメントの後、研究会に参加したメンバーによって討論が行われました。討論では仁連報告を中心に、既存河川政策、水資源政策が今後どのように変わっていくのか、また、淀川流域委員会をはじめ、河川政策の転換のきっかけが、たえず関西から発信されているように思われるが、その理由は何か、などがフロアから投げかけられました。

現在はまさに河川政策、水資源政策の転換の真っ只中にあり、国土交通省をはじめ、政府諸機関の動きが決してわかりやすくはなく、また、地域的にも一様でない中において、その方向性を明確にする（させる）議論は極めて重要であると考えられます。

そうした中、筆者が最も気になっているのは、政府政策がこうした地域性を伴いながらも、河川政策から水循環政策への転換を遂げようとしていると理解した場合、そのとき、ダムや河口堰は水循環政策の中でどのような評価を受けることになるのだろうか、ということです。水循環政策の中身に関する理解はまだまだ多様であり、共通見解に達しているとは考えられません。恐らく、これまで水資源政策、河川政策の中では必ずしも適切な位置づけがされてこなかった地下水を水循環政策の中に取り込んでいくこと、また、河川管理の限界の中で流域の土地利用にまで踏み込んでいくことなどは大方の同意を取り付けることができるだろうと思います。しかし、これまでの河川政策、水資源政策をリードしてきたダム・河口堰に対してより適切な位置づけをしていく作業が、水循環政策への転換を遂げる際に何よりも求まられているというのが筆者の考えです。この点については更なる議論を学会の中でしていきたいと考えています。

以上、全体の議論の展開を跡付ける作業もできていない報告となりましたが、2003年度冬季研究会の報告とさせていただきます。